

DHARMA EYE



法眼

南アメリカ国際布教総監に就任して

采川道昭

南アメリカ国際布教総監

この度、三好晃一前総監老師のご勇退に伴い、2005年5月1日付けで南米国際布教総監に就任いたしました。

ご承知のごとく、総監部の置かれている佛心寺は両大本山の別院でありますので、免辞令を受けられた三好前総監とともに、両大本山に拝登し、両ご開山様にご報告申し上げ、5月13日に赴任いたしました。以来、前総監の作成された年間、月間行事を基本として、毎日の行事を消化しております。

三好前総監は総監不在の時期の後を受けて、大変な時期を乗り越えてこられました。南米摂心その他、さまざまな新機軸を打ち出してこられました。また、昨年の南アメリカ開教100周年の記念事業を円成されたことは、大変なご功績であると敬意を表しております。

海外の布教区はそれぞれ歴史的経緯や事情、そして活動の内容が異なるので、他の布教区で用いている布教の手法がほとんど当てはまらないのが実情であることも、周知のことです。

ここ南米においても、日系移民の方々を対象にした布教と、非日系の人達の禅宗に対する要望が極端に異なる中においての布教ですので、両方の要望をバランス良く満たしてゆくことは、かなり困難なものがあります。つまり、ご先祖の供養が中心の日系寺院と、坐禅を通しての自己の参究を眼目としている非日系の禅道場とのバランスが肝要であるわけです。それらはともに、人々に安心を与える活動であるので、手段の違いを超えて一仏両祖に収斂してゆくようにお互いを高め合う努力であると言えます。

もともと日系の寺院に於いては、先祖供養やご祈祷のみではなく、暁天、夜坐も欠かせない大切な行持でありますから、両大本山や専門僧堂のような様相の日常であります。

総監部のある佛心寺を例にとりて具体的に申せば、暁天、夜坐の坐禅には、若い方を除いて日系の人は殆ど参加しておりません。ご先祖の供養に来られるのは、日系の檀信徒の方のみです。日中の文化活動の生け花、書道、仏教賛歌などには日系の方が大半で、坐禅に関連した、坐蒲や絡子を縫う会には非日系

の方が大半を占めるわけです。

つまり、仏教各宗派共通の一般寺院の行事と禅センター的要素が同じ建物を時間差で利用しているのが南米日系寺院の特徴であります。これら、日系の伝統文化的要素と禅センター的要素は、必ずしも完全に融合しているとは言えませんが、指導的立場の僧侶は、どちらに偏ることもなく行持を行っております。

さて、そのような状況の中で、来年は佛心寺開創50周年の記念すべき節目の年に当たります。(モジダス・クルーゼスの禅源寺は本年50周年、ローランジャーの佛心寺は本年45周年に当たり、それぞれ記念行事を予定しております)

日系寺院の歴史的発端は、昭和30年に当時曹洞宗管長であった高階躰仙禪師がご巡錫されて、曹洞宗の信徒の心を一つに束ねられ、寺院の建立の道を開かれたのがきっかけであります。そして、それぞれの地で布教師の方々の大変なご苦勞により寺院が建立されたのもご承知のことと思いますが、はからずも、来年は佛心寺の50周年という記念すべき年にめぐり合うというご縁をいただきました。

このめぐりあわせは、50周年という節目の年であるというだけでなく、初代南米総監の新宮良範老師はじめ、第二代青木俊享総監、第三代森山大行総監各老師方の念願であった坐禅堂建立の計画が、三好晃一前総監にも引き継がれ、そしてこのたび私が受け継ぐご縁をいただくことになりました。このような歴代総監の念願を受け継いだ大事業とのめぐりあわせもまた真摯に受け止めております。具体的に申せば、①記念慶讃法要、②記念誌発行、③坐禅堂建立および記念摂心、④開山塔、歴住塔、亡僧塔および永代供養塔などの墓塔建立、⑤事務所増設、⑥参道整備、⑦本堂内部改造(祈祷所開設)などです。

とはいうものの時間的にも目前に迫った行持であり、事業でありますから、早急に着手すべく準備をはじめております。両大本山、宗務庁との連携、および各方面のご協力により、バランスのとれた国際布教の実践道場の整備を心がけてゆきたいと念じております。

目前に迫った行持の報告が主となりましたが、近況のご報告を兼ねて、就任のご挨拶といたします。

合掌

祈りの日 八月六日

横山正賢

住職

申すまでもなく昭和20年8月6日は、人類史上始めて使用された原子爆弾が広島の上空で炸裂した日である。この頃禅昌寺は現在の中区薬研堀にあり、爆心地より1km以内に位置していた。約600坪の境内には現在の本堂と同じ規模の本堂と庫裡の外、鐘楼堂・稲荷堂があり、柿木や柳の木が茂った街中にありながら荘厳な雰囲気をかもし、子供達の恰好の遊び場となっていたようである。

広島城は天正15年(1587年)頃城地の選定に着手し天正19年(1591年)4月毛利輝元によって築城され、禅昌寺の創建された元和元年(1615年)城主福島正則当時の薬研堀は医者や学者といった文化人の多く住む町であったようである。

明治時代に入り広島は次第に日本一の軍都と化し、造船・兵器工場など軍需産業が盛んとなり人口が急増し、それが人類史上最初の原子爆弾投下の標的となったともいわれる。薬研堀一帯も歓楽街と変容していった。

当時禅昌寺の境内には商売繁盛を祈願する豊川稲荷社が祀られていて縁日には賑わい、芸者さん達も詣でる下町情緒豊かな風情をかもす寺であったそうだ。

盂蘭盆施食法要は毎年8月5日夕刻、歓楽街の賑わいが始まるころ営まれていたようである。妻仁子は2歳の時、昭和17年当山の22代住職となった父と母と共にこの寺に入り5才になったばかりだった。

昭和20年8月6日は、前日お寺にとって年間の一大行事である、施食法要をすませ一息ついた朝。一人娘仁子は、当時お寺の本堂で分散授業をしていた小学校の授業の始まりを待つ児童の様子を、回廊に頬杖をついて眺めていた。両親はたまたまお墓参りに来た檀家の人と、庫裡の縁側に腰掛けて談笑する長閑な朝であった。

午前8時15分原子爆弾が炸裂した。妻はこの時のことはほとんど覚えていないという。両親は幸いに縁先にいて倒壊した庫裡の軒下に埋まったものの、大した傷もなく這い出して、倒壊した本堂と庫裡の間に無傷で立っていた妻を抱えて比治山方面から段原町を通過して府中町の長福寺さんへ逃れた。数日後両親は妻を長福寺に置いたまま、火災の治まった焼け跡へ作業に通ったそうだ。その間に放射能に汚染され、母は1ヶ月後の9月10日に原爆症で亡くなり、父も昭和29年、妻中学2年生の4月6日始業式の日、原爆症による癌で亡くなった。

被爆の日、本堂に集まっていた三十数名の小学生の内、唯一人倒壊した本堂の瓦礫の下から足をのぞかせていた少女は、住職に引き出されて助かり、今も元気でおられる。他の児童たちは火の手が迫る中、助けようもなく多くが焼死したそうである。

今年は人類最初の大量殺戮爆弾が炸裂して60年、広島市民は8月6日を世界平和を祈る日として世界に訴えてきたが、世界の怨念の対立は深まるばかりである。国内にあっては犯罪の低年齢化や残虐な犯罪が氾濫している状況は決して平和国家とはいえない。被爆と終戦の還暦を迎える時、60年前貧困と憔悴から遅く歩みを進められた私の親世代の目指した願いや祈りは如何にあったか考えさせられる。

法句経の一句に「勝つ者 怨みを招かん

他に敗れたる者 くるしみて臥す されど 勝敗の二つを
棄てて ころ寂靜なる人は 起居ともに さいわいなり」とある。

スポーツやゲームの上での公平な勝負はお互いを鼓舞し互いに活かされるものであるが、自己顕示と利己的な振る舞いは、相手を折伏し抹殺することを考える、故に怨みをかい、己も抹殺される因となる。

勝ち負けの対立をやめて 他(森羅万象)に活かされていることに目覚めたとき、自らの生き方が見えてくることを示唆されている。

8月6日は仏教徒としてどのように平和を祈り実践するかが問われる日であると思う。



広島・原爆ドーム

『平和のための地蔵』プロジェクトの準備

クリガー祐幸

8月、アメリカ合衆国、カナダ、ドイツ出身の総勢35名の西洋人仏教徒が日本を訪れ、広島と長崎への原爆投下60周年のため巡礼を行いました。この巡礼は、27万にのぼる数の地蔵菩薩の画像を集め、平和への供養として日本にもっていくという、2年間に渡って継続されてきた努力の結晶でした。地蔵の多くは布に描かれキルトや平和旗に縫いこまれており、合衆国各州や世界各国、各大陸の人々から寄せられたものです。巡拝団が出発するときまでには合わせて50万近い数の地蔵が集まっていました。

出発前夜、堂長を含めた大願禅寺の常住修行者全員が夜の10時過ぎまでかけて巡拝の準備を済ませました。地蔵のパネル、つづれ織り、糸に通された折り紙などが寺中に置かれていました。すでに日本に送られているものもあり、まだ整理途中の積み重ねられたスーツケースに入れられたりしているものもありました。このプロジェクトの一環として送られてきた何百何千もの地蔵像に対する深い感謝の気持ちと、これから日本で経験することに対するわくわくするような期待感とが入り混じった、高揚した気分がその場に漂っていました。



長崎・原爆落下中心地公園にて
地蔵パネルを展示

『平和のための地蔵』というプロジェクトは、人々が自分の生活の中に平和を育て、それを表現することができるように援助することをその使命としています。これまでの2年間、ずっとこのプロジェクトとともに生きてきたわたしは、そういう単純な願いがどれほど力強いものであるかを目の当たりに見るといって、ありがたい贈り物をいただきました。地蔵を作ることを通して自分自身の心を見出した囚人たちから届いた手紙。自分たちが見たりしたことすべてを同じように深く嘆き悲しみ、広島と長崎に持って行ってもらおうと、小さな白布に平和への願いを表現するという単純な行為によって、心の重荷を少しおろすことができた戦争の犠牲者や退役した兵士たちの物語。地蔵菩薩と日本の歴史を学び、こころをこめて地蔵の像を作り、日本に持って行ってくださいとわざわざお寺にやってきてくれた学校の生徒たち。スタッフの手伝いをしてきたわたしにとって、このプロジェクトは平和の海のように広い祈りを入れる容器であり、またその証言でした。これはわたしの人生においてまたとない機会でした。

『平和のための地蔵』プロジェクトのことを知ったとき、胸にうったえるものを感じたので、わたしはこのプロジェクトが始動したころからたくさん地蔵のパネルを作ってきました。そして自らの内に平和への願いがあることを発見し、またその願いを周囲の人々に伝えていく。このプロジェクトを通してもたらされる平和と癒しに、自分が直接つながっていることを経験してきました。



澄禅師、入所者にお地藏さんを手渡す



折り紙地蔵を手渡す

背が高く雄弁であったわたしの祖父は1940年代に化学技術者として原爆製造のマンハッタン計画に参加しました。彼はミサイルを開発することを一生の仕事にするようになりました。わたし自身のいのちは間接的に祖父のいのちから来ています。『平和のための地蔵』プロジェクトに参加することで、わたしと祖父のいのちを、善いことのために使い始めることができるようになったような気がします。祖父はこの春亡くなりました。『平和のための地蔵』プロジェクトの巡拝で日本へ行くわたしの心の中には、祖父の過去、人に危害を加えることもできれば親切にすることもできる人間という存在に対して、複雑なものがありました。

時間が経ち日本に持っていくスーツケースが積み上げられていきました。わたしたちは地蔵菩薩の絵で飾られたそれぞれの布が、どれほど美しいかを話しました。一つ一つの小さな布の背景には長い歴史と真摯な平和への希望があります。作成されたこれらの地蔵パネルや祈りの旗が、日本で美しく風になびくことでしょう。

京都での数日は寺院や神社を訪ねました。海を隔てた仏法の兄弟姉妹たちが、同じように行っている仏教修行の古いルーツをこの眼で見れたことは、西洋人の禅の修行者としてたいへん有意義な経験でした。数え切れないほどたくさんの寺院と、角々に設けられた神社で、明るく騒がしい下町京都の深い優美さが与えてくれた気分は、残りの旅の間もずっと続きました。

京都の後、わたしたちは蒸し暑さを追いかけるように南に下り広島に入りました。広島では禅昌寺で暖かいおもてなしを受けました。そこに宿泊しなければ、わたしたちアメリカ人には決して知ることができなかった、家族で暮らしているお寺の生活を体験することができたのです。日本を訪れる大半の巡拝者はお寺の外側を見るだけだということを知りました。わたした



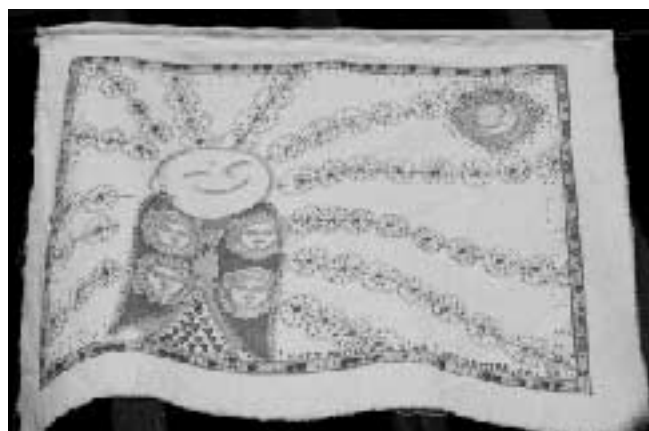
長崎・原爆落下中心地公園にて般若心経の読経

ちの旅は単なる観光ではありませんでしたから、鐘、作務、簡素だけれども美味しい応量器の食事といった、お寺での日々の生活の内側に入ることができたのです。巡礼の全期間にわたってそれができたことにとても感謝しています。

広島では平和公園と記念館を見学しました。わたしたちの多くは事前に原爆投下、戦争、その後の歴史を勉強しながら、今回の旅の準備をしていました。しかし、破壊的な爆弾が落とされた場所に実際に立つという経験、その衝撃に対する準備はするすべもありませんでした。



広島・灯籠流し



地蔵パネル

記念館には原爆犠牲者の所持品などがたくさん展示されていました。衣類の切れ端、穴の開いたかばん、真っ黒に焼け焦げた弁当箱。そのような展示品を見てから外に出たとき、爆弾の下でその悲惨さを目撃し、痛みを味わった土地に立つことは、わたしたちのこころを沈黙させました。そして、なぜわれわれがそこに来なければならなかったのかという現実に戻らせてくれました。

毎年恒例の広島平和記念日は、平和を擁護しようとしている個人やさまざまなグループの大集会でした。爆弾が爆発したのと同じ時刻に「ダイ・イン」が行われました。それはそこにいるすべての人が、その場で地面に倒れ伏すことです。夕方には無数の紙の灯籠が公園のそばの川に流されました。灯籠の一つ一つに平和の祈りが書かれていました。

続いて汽車に乗って長崎に向かいました。わたしたちはいろいろな巡礼地を訪れ長崎での平和記念行事に参加しました。『平和のための地蔵』プロジェクトは諸宗教団体合同の法要や、市内での平和パレードといったあらゆる活動に公式に参加しました。

巡礼のなかでもっとも重要だったことの一つは、人と人のつながりということでした。わたしたちは老人ホームや平和記念日に被爆者たちと直に会うことができました。また、わたしたち西洋人巡礼者と、曹洞宗からのすばらしい同行者や案内人との間には友情が生まれました。わたしたち全員が、行く先々で出会った人々との間に生まれた、大変貴重な思い出を胸に帰国の途につきました。

世界平和という共通の願いは、言葉や年齢、国籍の違いを超越しています。わたしたちの巡拝団において、それは明らかでした。さまざまに異なる背景をもった人々が、修行と平和という共通の目標において、お互いにつながりあうことができたからです。



様々な地蔵たち



広島・平和記念像前にて般若心経の読経

『平和のための地蔵』プロジェクトに参加できたことを光栄に思っています。帰国する前の最後のミーティングで、わたしたちは今回の旅の経験を、自分のものとして消化するには時間を要するであろうことを話し合いました。「開いた手」の精神—与えるための開いた手と受けるための開いた手—これこそが巡拝の精神です。わたしたちが世界に与えようとしたことの効果の如何を知ることはできませんが、日本滞在中にたくさんの人々から受けた親切、洞察、平和の贈り物は、遠い故国に持って帰ることができた輝く宝石です。



般若心経の書かれた地蔵パネル

ロス・アラモスで行われた 「見届ける実践 bearing witness」 —広島・長崎原爆投下60周年に寄せて

ハリファックス・ジョアン

ウパヤ禅センター サンタフェ ニューメキシコ

8月5日金曜日の夕方、ニューメキシコで午後5時15分、日本では8月6日の朝8時15分、ニューメキシコ州サンタフェにあるウパヤ禅センターの鐘がゆっくりと打ち出され、広島と世界の鐘や世界中の鐘と唱和しました。それらの鐘の音は、日本の広島に原子爆弾が投下された時間を告知させたのです。ウパヤ禅センターでの広島・長崎原爆投下60周年の「見届ける実践のリトリート」はこうして始まりました。このリトリートはウパヤ禅センターの指導者であるハリファックス・ジョアンによって発案、組織されロスアラモス研究グループ、仏教徒平和協会 (Buddhist Peace Fellowship)、サンフランシスコ禅センター、『平和のための地蔵』プロジェクト、棚橋一晃氏の『軍隊なき世界』の後援によって実現しました。



ウパヤ禅センター参禅者の行進

お寺に集まった人々の前で、わたしはマンハッタン計画の指導者であった物理学者のロバート・オッペンハイマーが引用した、バガヴァッド・ギータの一節を読み上げました。「今やわたしは死、すなわち世界の破壊者となった」。続いてサンフランシスコ禅センターのバルドクウイン竜門と、仏教徒平和協会のディレクターであるマイア・デュエーが、核兵器の拡散を終わらせようという趣旨の、広島市長からの手紙を読み上げました。そして、二人の被爆者（広島の上田さんと長崎の橋田さん）の証言が通訳の感情のこもった声で朗読されました。

続いて、参加者全員が懺悔文を唱和して108回の礼拝を行いました。「我昔所造諸悪業 皆由無始貪瞋痴 従身口意之所生 一切我今皆懺悔」・・・

そのあと、人々は仏壇に線香を供え、上田さんと橋田さんの前

で深々と礼をしました。その日の夕方、報道陣の見守る中、世界各国から来た仏教指導者、キリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒、若者、年配者が核兵器という終末論的な爆弾の投下によって引き起こされた大きな苦しみに、心からの赦しを乞い、そうした兵器の製造と拡散が終焉しますようにと祈りをささげました。

ニューメキシコで8月6日の日曜日、100人のサンガメンバーは原爆が発明され組み立てられた地であるロスアラモスとアシュレイ池に足を運びました。多数の平和主義者、抗議者、有名な反核活動家でイエズス会のジョン・ディア神父などが加わりました。みんな粗布を身にまとい、灰を持って国立研究所の入り口まで歩きました。

その後、サンガメンバーは坐禅を行いました。学者や芸術家、政治家たちは核兵器の拡散防止の問題や事実を話し合い、核兵器廃絶の運動を全員で見届けました。その様子を見守る大勢の聴衆に向かって、被爆者が再び話を始めました。

坐禅をしているグループの前には、高齢の日本人たちからウパヤ禅センターに送られてきた着物が置かれていました。着物の上には地蔵菩薩が描かれた布が縫い付けられていました。その日、サンガメンバーは、この感動的な集会に参加した人たちに小さなお地蔵さんを配りました。これらのお地蔵さんも、やはり日本からの贈り物でした。こうした贈り物に対する感謝の気持ちは深く静かなものでした。

午後遅くになって、サンガメンバーの多くはロスアラモス記念館を訪れました。爆弾の開発と使用がそこでどのように描かれているかを見てみようと思いました。今日の世界において、相対的な真理がいかに意味をもたないものであるかということを実感しました。

その夜、人々はウパヤ禅センターに集まり、この日に起こった出来事からどのような感想を得たかを話し合いました。このあと2日間にわたって50人の人々が坐禅をし、早朝と日中は接心のスケジュールに従って過ごしました。参加者のなかにはドミニコ会の尼僧やイラク戦争の退役兵士、社会活動家、献身的な平和主義者がいました。

夕方、被爆者たちがグループと会い、彼らの物語と、この時期にアメリカ合衆国にいるということについての感想を語りました。ニューメキシコで8月8日の夕方、日本の長崎で原爆が投下された時間に『平和のための地蔵』プロジェクトを行っている友人たちと連携して、禅センターは諸宗教団体合同の感動的な法要を執り行いました。仏教、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ハワイ、そしてヒンズー教の平和の祈りを捧げたのです。

ニューメキシコで8月9日、リトリート参加者全員がロスアラモス国立研究所に隣接する考古学的遺跡に行きました。ツァン・

カウイの高台（ニューメキシコの高原にある古い村、プエブロインディアンの石や洞窟で囲まれた場所）から研究所を見下しながら、参加者は世界から暴力をなくすために努力すること、核兵器の製造と拡散を終わらせるように邁進することを誓いました。

参加者の頭上ではニューメキシコの明るい空が輝いていました。彼らの周囲には赤い砂と大きな岩の崖、サンガメンバーや研究所がその上に立っている地面がありました。研究所の真上には暗い嵐の雲がかかっており、釈尊が教えた苦しみの真理（苦諦）をわれわれに思い起こさせました。それは苦しみという事実を見届け、60年前に日本の真ん中で何が起きたかを思い出すときでした。それはまた、啓発活動や抗議をし、働きかける努力を通して苦しみを終わらせることに、われわれの誓願を振り向けるときでもありました。参加者はバルドクウイン・竜門の導きのもとで、核兵器の拡散によって引き起こされた苦しみに目覚めること、核兵器の製造と拡散がどのような結果をもたらすかについて積極的に発言すること、いのちを肯定する諸原理をもたらすような組織を保持すること、世界のこころを開き平和のために働きかけていくことを誓ったのです。



ツァン・カウイの高台から研究所を見下ろす

打坐をめぐる断想集 私の『坐禅参究帖』（十五）

藤田一照

《断想 24》 坐禅と覚知 II

覚知の裡に事実をたらい、覚知を覚知たらしめながらそれ自身は覚知を越え、覚知によっては決して届かない何かがある。それは、それなしには覚知がそもそも存在しないようななにかなのだが、覚知にうたえることばを使って「これこれしかじかのもの」とは決していえないようなものだ。つまりそれに述語のつけようがないありかたをしているのだ。だから、禅ではた

たとえば「たれ（誰）」という疑問詞を使ってそれを指し示す。（「非思量にたれあり、たれわれを保任す」『正法眼蔵坐禅箴』）「非」という接頭辞に単純な否定ではなく「包み越える」という独特の意味をもたせる禅の語法を借りて、私はその「何か」を表すために、「非覚知の事態」というこねれない言葉を前回使ってみたのだ。

ここでいう「非覚知の事態」とは具体的には坐禅の全体（坐禅している本人とその環境すべてをひっくるめたもの）に他ならない。坐禅における覚知のありようはこの「非覚知の事態」との関係という文脈において参究していく必要があると思う。それを抜きにして覚知にばかり焦点をあてると、覚知を過大に評価しすぎたり（たとえば坐禅と瞑想の混同、坐禅の心理主義的偏向など）、逆に過少に評価しすぎたりする（たとえば坐禅において覚知が果たしている重要な役割の軽視・無視、坐禅の外観にばかり注意をむける表層的坐禅観など）ことになり、覚知を正しく坐禅の中に位置づけることに失敗しかねないからだ。

坐禅の全体＝非覚知の事態は覚知と同次元のものではないが（「不二」）、坐禅の全体が覚知となって自らを表現する（逆にいえば、覚知が非覚知の事態を反映する）というありかたで直接に接している（不二）のだということに眼をつけなくてはならないと私は思っている。ここから坐禅修行のしどころとして二つのことがあげられる。一つは、覚知の根源・主体は覚知そのものではなくあくまでも非覚知の事態の方なのだということをごくまでも見失わないこと。つまり、坐禅の全体から覚知が一方向的に生み出されてくるのであって、この本末関係をくらませないこと。もう一つは、非覚知の事態からのメッセージを歪曲や雑音なしに正確精密にききわけること。それと同じことだが、非覚知の事態を忠実にそのとおりに反映した覚知であること。坐禅における覚知がこういう質をもつような坐り方はどうななければならないのだろうか。

坐禅に関して、「心意識の運転を停（やす）め、念想観の測量（しきりょう）を止（とど）む」（『普勸坐禅儀』）ということが言われる。これは心意識や念想観を敵にまわしてそれらを単に除去・廃止するというのではない。それが意味するところは、こころを自分の望むとおりに統制しある特定の精神状態をもっていこうという自我意識に根ざす思いはからいやつくりごと（「自調の行」）が一切やんで、自我意識以前のところから出てくるおのずからなるいのちのはたらきのままにまかせているということだ。停め、止むべきは、自分がある目的やアテをもって積極的にこころを使う「運転」や「測量」という意志・意欲的活動であって、精神活動そのものではない。心意識の運転が停み、念想観の測量が止まっても、坐禅のなかでは、思い量りのないままで覚知が活き活きと現じている。『正法眼蔵 坐禅箴』にある「不思議而現（不思議にして現ず）」という言葉の通りである。

このように、心意識の運転を停め、念想観の測量を止めて、覚知が「不思議而現」という状態になることが、覚知が坐禅の忠実

な反映になるための不可欠の条件の一つなのだ。しかしそれは実際なかなか容易なことではない。

《断想 23》で触れた「覚知至上主義」で生きている我々は、覚知の内容を自己の全体だと思い込む過ち（覚知と自己との同一視、つまり「覚知的わたし＝自己の正体」という錯覚）を犯してしまいがちだ。だから普段我々は、覚知の内容に一喜一憂するし、自分の都合や好み、考えで覚知をいつもコントロールし、処理しようとしている。こういう「癖」を坐禅のなかにもちこんでしまうと、先程ふれた「運転」や「測量」に終始して坐禅がセルフ・コントロール（「思量而現」）の一方法になってしまい、坐禅が「不思量而現」という本来の面目を失ってしまう。この我々が持っているどうしようもない癖から坐禅を守るためにはどうしたらよいのだろうか

まず、自分が覚知と自己を同一視してしまっているというその実態を、自分の日常の思考や言動に照らしてはっきり認識することだ。そして、覚知と自己を同一視することは大きな誤解であり、自分の勝手な思い込みにすぎないということを知性を使って十分納得する必要がある。覚知は自己の一部ではあっても自己のすべてではないということ、**「なるほどそうか」と深くうなづくところがなければならぬ**。しかし、こういう根深い癖というものは、頭で納得したくらいではなおるものではない。坐禅は、「覚知的わたし」という夢から覚めて「自己の正体」に帰ることを実地にやることなのであるから、やはり最終的には実際に正しい坐禅をする工夫を通してしか、この癖を根本的に矯正する道はない。

坐禅を試みてみればすぐに思い知らされることだが、自分が覚知と自己を同一視している限り、ただ単純にそれを覚知として受け取れず覚知の内容にどうしても過剰に反応してしまい、それにひきづられてしまう。そして、肝心の正身端坐の努力を忘れて覚知の中身を相手にしてそれをやり繰り返すほうに重心をかけてしまうのだ。そして坐禅が坐禅でなくなってしまう。我々は坐禅中

刻々に、正身端坐に深まるかそれとは相容れない覚知の中にとりこまれていくか、その岐路に立たされているのだが、大抵の場合知らず知らず（あるいはそれと知りつつ）後者の方へよろめいて行ってしまう。我々は坐禅のこういう難しさをしみじみ味わうことによって、この同一視の強さ・根深さ・しつこさをあたためて体験させられるのだ。

しかし、我々坐禅修行者としては、そこに停滞している訳にはいかない。さもあらばあれ、それでもなお覚知への惑溺から刻々覚めて新たに正身端坐の方向にとってかえすという努力を何度でも繰り返すしかないのである。こういう精進が実ってだんだん坐禅に「慣熟」してくると、覚知と非覚知の事態（＝坐禅の全体＝自己の正体）との区別がつくようになる。すると正身端坐と覚知がもはや以前のような葛藤・対立関係には入らず、むしろ覚知が正身端坐の役に立つようになってくる。実は問題の根は覚知そのものではなく、覚知に対する我々の態度、関係の持ち方にあったのだ。それが変容してくると、覚知に浮足立ちそれにとりこまれて踊らされてしまうのではなく、その覚知を調身・調息・調心への手掛かりとして坐禅に有効に生かしていけるようになってくる。そしてさらには覚知が正身端坐の欠かせない一部としてそのなかに融合・統合されていく。こうして覚知が坐禅と一枚になり坐禅の覚知（「不思量而現」の覚知）になってくると、覚知そのものに新しい展開が起こってくる。『坐禅参究帖』（七）、（八）、（九）で触れたような微妙な全身の一如感や微細で多様な動きの体感などは、そうした覚知の実例である。

坐禅における覚知に関してはまだ論ずべきことがあるが今回は紙面の関係でここで止めることにする。坐禅を行わず者として常に心得ておくべきことは覚知が覚知として正しく生かされているような坐禅をすることだ。そういう坐禅のなかでは、普段の煩惱に相応した覚知が「坐仏」の一部となって生き生きと働いているのだ。覚知が「成仏」しているような坐禅をどう坐るか？それが問題だ。

国際ニュース

◎2005年5月1日

三好晃一師の後任として山形県宝泉寺住職采川道昭師が曹洞宗南アメリカ国際布教総監に任命された。師は長年にわたって大本山總持寺の役寮を勤めてこられた。

◎2005年3月31日

横山泰賢師が曹洞宗国際センター書記を辞任した。師は現在イタリアミラノにある曹洞宗ヨーロッパ布教総監部庶務として活動中である。

国際的行事

2005年9月にブラジルのモジ・ダス・クルゼスにある禅源寺の創立50周年記念行事、ローランジャにある仏心寺の創立45周年行事が挙行された。